僕と私の
The diary of Sleeping under the stars for Ours
露出日記
著/添牙 いろは
イラスト/毒でんば

僕と彼女の露出日記

添牙いろは

目次

少年のためのオナニー講座 5
家出少女は服をも捨てる 19
屋上は僕だけの秘密基地！ 45
私の夏休みの過ごし方 55
僕と授業とオナホール 65
素敵な私の山登り 81
嵐の中を僕は往く 95
私の全裸卒業式 111
僕の全裸入学式 131
私の全裸入学式 145
司書の僕は恥ずかしい 161
私の図書室利用法 173
僕の大失態は女の人の目の前で..... 187
私の大失禁は男の人を追いながら..... 201
彼女との出逢いは突然に 217
彼との出逢いは突然に 241
彼女との再会、そして…… 267
彼との再会、そして…… 287
二人のための全裸結婚式 307

少年のためのオナニー講座

大学を卒業した俺は、家業を継ぐために生まれ故郷に帰ってきた。四年間の上京を経て、改めてこの町を眺めてみると、何だかとても小さく見えた。

これでも、当県最大の地方都市ではあるのだが……国家としての首都機能を抱える大都市と比較するのは酷というものか。道路も建物も、その隙間に植えられた街路樹も、どこか手の入りきっていない発展途上な印象が否めない。それこそ、未だ精霊だか妖怪だかの類が留まれる余白がありそうな。

そうは言っても、この町もそれなりに便利になりつつある。その発展の一つとして、実家から徒歩数分程度のところに、いつの間にやらコンビニが建っていた。まるでモザイク模様の如くコンビニの看板が乱立していた大学周辺はやり過ぎとしても、俺が高校を卒業した頃は、自転車で一〇分以上走らせたところが最寄りだったのだから便利になったものだ。さすがはコンビニエンスといったところか。

日付が変わるか変わらないか、という深夜。俺は空いた小腹を満たすために千円札一枚をポケットに捩じ込み、街の発展の恩恵にあずかるために外に出た。これがかつての自転車一〇分だったら諦めて寝ていたところだ。

長くもないはずのその道のりの途中で、俺は文明の忘れ物のような光景に出くわした。

そいつは、十字路の脇からひょいと顔を出し、辺りを見回す。だが、俺と目が合う

と、まるで人喰いの怪物と相対したかのように青ざめて再び通りの奥へと引っ込んでいった。

小さな男の子のようにも見えたが、深夜という時間帯にはあまりに似つかわしくない。子鬼のようなファンタジーな生き物なら面白そうだし、そうでなくとも、こちらを見て逃げ出したのだ。追っていけば、それはそれで何か面白いことがあるかもしれない。

俺は行き先を少しばかり変更して、子鬼の入っていった路地に寄り道してみることにした。

その先はすぐに行き止まっている袋小路なのだが、そこに子鬼の姿は見当たらない。道の両脇には民家が数軒と、新築のマンションが一棟建っている。もし家の中に入ってしまったなら追いようもないが、一箇所だけ探索の余地が残されていた。マンションの駐輪場だ。

折角ここまで来たのだから、と軽い気持ちで足を運んでみると……そこで、俺は子鬼の正体を目の当たりにした。

「ご……ごめんなさい……」

停められている自転車と自転車の隙間で小さく蹲って震えている男の子は、俺の方を向くこともできず、足下に対して泣きそうな声で謝罪の言葉を繰り返している。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」
このまま立ち去るのがお互いのためだったのかもしれない。だが、こうも謝罪の言葉を連呼されては、こちらとしても免罪のために諭さないといけない気がしてくる。
「神は全て赦してくれるから、とりあえずそこから出てきなさい」
男の子は少し黙ったが、俺に従う他ないと諦めて出てきた。遠目で見た時はもっと小さく感じたが、いざ目の前で対峙してみるとそれなりの歳のコのようだ。まだ中学校に入るか入らないか、といったところか。
「どうしてこんな時間に、こんな格好で、こんな場所に……とは訊かない」
こちらが理由を問うことなく理解を示したことに、少年は驚いて目を丸くした。
「気持ちいいもんな。俺も昔はキミと同じようなことをよくやったものだ」
初対面の相手からとんでもない告白を聞かされて、少年はあからさまに訝しい表情を向けてくる。が、股間を隠す両手の中を無意識にモゴモゴと蠢かせている様子から、半信半疑、といったところなのだろう。
「……解った。じゃあ、俺もキミと同じ格好になれば信じてもらえるかな？」
高校を卒業して、人の多い街に引っ越してからはご無沙汰だった。しかし、またこの街に帰ってきたのだし、何より少年の罪の意識を軽くするため、俺も一肌脱ぐべきだろう。

春先とはいえ夜更けとなるとそれなりに冷える。防寒のため重ね着していた長袖を、中のTシャツと一緒に豪快にめくり上げて首を抜く。それを誰のとも知らない自転車の籠の中に、あたかも洗濯籠に投げ入れるように無造作に押し込んだ。

続いて、ズボンのベルトを外して、中に穿いていたトランクスと一緒にずり下ろす。靴下も中で巻き込みながらだ。一旦靴を脱いで硬めのジーンズから足首を抜くと、これも軽く丸めて上着の上に放り、改めて靴を履き直す。さすがに硬い人工の地面の上を裸足で歩くのは辛い。

こうして俺も、少年と同じ姿になった。

「それじゃ、ちょっと話でもしようか」

「……うん！」

少年は少し目のやり場に困っていたが、こちらの有り様に倣い、頑なに守っていたところからそっと手を下ろした。その向こう側から現れたのは、まだ毛も生え揃っていない〇い姿だった。それでも未知の本能に目覚めようと懸命に分厚い皮から外を目指そうとしている。この大人びた反応は、少年に同性愛の気があって、俺の身体に欲情している……のではなく、他人とこのような形で、夜空の下で言葉を交わす、という異常なシチュエーションに興奮しているから……であって欲しい。少年と同じような反応を我が身に見せてしまっている俺の方も。

マンションの住人のママチャリの荷台に勝手に尻を着け、俺は少年の懺悔にも似た告白に聞くこととなった。

彼は山奥の片田舎で暮らしていたが、来月からこの町の〇学校に通うため、先週引っ越してきたとのことだった。

物心付く前から全裸で川遊びをして育ってきたが、体が大きく成長し、友人らに合わせて水着を着用するようになった時、自分の露出癖に気付いたらしい。

自然豊かな農村では、道はあっても人は無く、衣服を纏わぬまま闊歩していても誰に見つかることもなかった。だからこそ、地方都市とはいえ、この町の人の数には随分驚いたようだ。

「でも……僕、我慢できなくて……」

全裸で外を出歩きたいという衝動を抑えきれず、とうとう実行してしまったところ、記念すべき第一回目から俺に目撃されてしまったらしい。彼と同じことを何度も繰り返してきたにも関わらず、一度も見つかったことのない俺と比べると、なんとも運の悪いことである。とはいえ、見つかったのが俺だったのは、むしろ幸運だったかもしれない。

「だが、この道は失敗だったな。この通り、逃げ場が限られている」

「うん……僕、この街のことよく分からなくて……」

残念そうにアタマとアソコを項垂れさせる少年に、先輩としてこの町での楽しみ方を教えておくことにしよう。
「そうだな、じゃあ、ちょっと俺についてきてくれ」
「うんっ」
話の途中で元気を失っていた少年は期待に股間を膨らませて、駐輪場を後にした俺の背後にピッタリとついてくる。
先ほど少年と目を合わせた十字路。その『止まれ』の停止線の前で俺は一旦足を止め、耳を澄ます。
「物陰から軽々しく身を乗り出すと、さっきのようなことになる。先ずは音を聞くことだ」
「はいっ」
顔と股間をこちらにしっかり見上げたまま、少年は下半身の方で頷いた。
その後、カーブミラーを確認して、俺たちは堂々と十字路に進入する。不安を抱えていた少年が、俺の左手をぎゅっと握る。俺の方も、コンビニが近いこともあり、人が通るかもしれない、と内心穏やかではない。しかし、年長者らしく焦る素振りは抑えこんでゆったりと渡り切った。
二人で手を繋いだまま細い道をしばし歩いたところで、更に細い、人がすれ違うの

がやっとの路地へと入った。手を繋いで並んで歩くには肌を密着させる必要があり、この道を選んだのは誤ったか、と少し後悔する。

この裏路地には街灯もなく、足元も危ういほどに暗い。怖がるかな、とも思ったが、そこは田舎育ちだけに、闇に対して臆することは全くなかった。

両サイドから迫ってくるようなブロック塀の隙間を少し行くと、その片側が見通しの良い金網へと変わる。その奥には整えられた芝生と舗装道の合間を木々と街灯が点在する見晴らしの良い公園が広がっていた。

長々と連なっていた金網だったが、ここは人が通れるように途切れている。市営公園の裏口である。それまで目を輝かせて園内を眺めていた少年は気持ちを昂ぶらせたまま、俺の手を離して駆け込んでいった。

気持ち良さそうにはしゃいで辺りを走り回っていたが、芝生の真ん中まで来ると、大の字になってゴロンと仰向けに寝転がった。芝生は丈が低く、その中で直立する少年がとても目立っている。

いくら人気がないとはいえ、万が一ということもある。俺は少年とあまり離れないよう傍までゆき、彼の隣に腰を下ろす。夜露に冷えた芝がチクチクする。そこに寝そべっている少年は、きっと今までこんな、いや、もっと険しい自然の中を駆け回っていたのだろう。全裸で。

風もないのにヒクヒクと揺らす少年を見て、
「あまりやりすぎるなよ。この公園は夜でも時間帯によってはランナーがいたりするから」
「うん！」
でも、今はいないのでしょ？　と言いたげに、少年は高揚感を熱(いき)り立たせていた。
「やっぱり、キミはこういう場所の方が性的興奮を掻き立てられるんだな」
「せい……何？」
ガバっと起き上がった少年ははぐらかす様子もなく、本当に何のことか解からずに不思議そうに首を傾げている。
「もしかして、オナニーもしたことないのか？」
「え？　何？　多分、ないと思う……」
語尾を小さくしながらも、俺が言うのだから何か楽しいことに違いない、と嬉々とした上目遣いで教えを待っている。
彼は今まで外で昂ぶらせた感情をどう処理してきたのだろう？　悶々としながらそのまま帰宅していたのか？　間違いを起こす前に、自分でクールダウンする術を教えておく必要がありそうだ。
「よし、手本を見せるから、俺と同じようにやってみろ」

さすがに男の股間を見ながら気持ちを高めることは難しい。目を閉じて、真っ当で邪な想像を脳裏に巡らせつつ、一定の硬さを取り戻すまで握り拳で前後に伸び縮みさせる。ようやく硬くなったかな、といったところで目を開けると、少年は俺のことなどお構いなしに、自分の股間をこすり続けていた。

「痛いけど……っ、何か気持ちいい……!?」

「気持ちいいうちは続けてろ」

うん、うん、とうわ言のように相槌とも吐息ともいえない声を上げながら、それでも手のピッチは緩めない。

「何だかよく判らなくなってきたけど……あっ!?」

少年の先から数多の子種が飛び出した。おそらく、人生での初射精だろう。

「これって……ああ……そっか……」

断片的に持っていた知識が、この行為によって一つに結ばれたようだ。

「オナニーって、気持ちいいけど、何だか眠くなってきちゃった」

ようやく硬さを失った少年は、起こしていた身体を再び芝生の中へと放り投げた。

「ここで寝るなよ」

「うんー……」

同性と濃密なスキンシップを交すのは避けたい。本当に眠ってしまう前に彼の腕を

引っ張って強引に立たせ、彼の服の場所まで連れて行くことにした。
どこに置いてきたのか所在を尋ねてみると……
「服？　家に置いてきたよ」
彼の家は先刻駄弁っていた駐輪場のマンションで、自室が外の廊下に面しているのを利用して、一糸も纏わず窓から出てきたのだとか。
「マンションの廊下は住人と鉢合わせたら最悪だから控えておけ」
「うん、ごめんなさい……」
殊勝に謝る少年に、俺はいま来た道を二人並んで帰りながら街中で脱ぐための心構えをいくつか伝授した。
「田舎と違ってどこでも脱げるわけじゃないんだから、きちんと下見をして、人がいない時間をチェックしてだな……」
「はーい」
一つ一つ素直に聞いてくれるのは良いのだが、碌でもないことを吹き込んでいる気がしないこともない。
そうこうしているうちに、俺たちは再び彼のマンションの前までやってきた。裸の少年は、名残惜しそうにゆっくりと俺の指を離していく。
「また困った時は……相談に乗ってくれる？」

引っ越してきたばかりで寂しいのは解るが、同性と野外露出を楽しむ趣味は俺にはない。互いの素性を知ってしまった以上、あまり密に接するのは良くないだろう。だから、

「困ったときは、神の声に耳を傾けるといい。神はどのような姿の者でも平等に見守ってくれている」

とはぐらかした。それを察して少年は残念そうに、

「うん……そっか。じゃあ、おやすみなさい」

大人しく引き下がってくれて、俺は少なからず安心した。

少年は、一度抜くことで柔らかく垂れ下がるようになったモノを振りながら背を向けて、ガラス張りのエントランスへと入っていった。そして、自分の家のものと思われる郵便受けをカチャカチャ回してアンロックし、その中から家の鍵を取り出した後、オートロックを解除して住居スペースへと入ってゆく。その間ずっと全裸。長い時間ではなかったが、煌々と照らされたホールにしては無防備過ぎやしないか。もしかしたら監視カメラに見られているかもしれないし。彼にとって、マンションの中は家と変わらない感覚なのかもしれない。それも修正しないと、いつか警察のお世話になりかねない。

そうならないように祈りつつ、俺自身も駐輪場で身なりを整えて、本来の目的であ

ったコンビニに足を向け直した。本当に、何事もなかったかのように。誰にも出遭わなければ本当に何もない。我々の嗜好は、そういう類のものなのだ。

この先も、何事もないことを願うばかりだ。彼の身にも、俺の身にも。

家出少女は服をも捨てる

さて、これは俺自身の罪の告白になるが……俺にもあの少年と同じような性癖が、ある。脱ぐことが目的ではない。着ないことが楽だっただけだ。

自室では裸も同然で過ごしてきた俺にとって、〇学の学生服はまるで拘束具のようだった。その束縛が、俺に『学校でも普段の姿で過ごしてみたい』という背徳的な願望を抱かせ、ある日の放課後、ついに実行に移してしまった。

その時の開放感を、俺はこの歳になっても未だに引き摺っている。無論、法的にも道義的にも許されぬ所業だとは解っている。自分の年齢を考えると、この過ちを神以外に目撃されれば、あの少年よりも厳重に処罰されることとなるだろう。

上京していた頃はここより遥かに人が多い都市に住んでいたこともあり、そのような趣味を発露させる機会にも恵まれず、その性癖は徐々に薄らいでいったものと思っていた。

だが、それは単に影を潜めていただけだったようだ。帰郷した直後の少年とのセンセーショナルな出会いによって、俺自身の露出癖もまた再燃してしまった感は否めない。

彼との露出行為の数日後、俺はクリーニングに出す冬物を整理していた。そこで手に取ったロングコートを見て……今夜、最後にもう一度だけあの姿になってみたいと思ってしまった。このような上着を羽織って外出するには些か季節が遅いかもしれな

いが、婦人物のワンピースのような脱ぎやすい上下繋ぎの服は男物にはない。
洗濯屋に出す前に俺は、このコートにもう一日だけ付き合ってもらうことにした。

先日少年に薦めた公園は当人に遭遇するかもしれないので今夜は逆方向へと足を運ぶ。
全裸コートなど、夏場は決してできようもない。暑くなれば薄着にはなれるが、シャツとパンツにセパレートされるし、シャツはともかく下は足を抜く必要があって意外と脱ぎ難い。そんなことをモゾモゾと道端でやっていられない。
ゆえに、大胆な露出はしばらくできなくなるな、と前のボタンを全て外して前から上着の中に町の風を送り込む。足元に視線を向けると、それだけで興奮している様子が自分の目に映っていた。
昂った気持ちに身を任せて袖から腕を抜き、バサっと脱いだコートを遠心力のままにぐるりと回して左肩に引っ掛ける。
道の真中で全裸である。頭上には街灯。左右には家屋。前後には見通しの良いアスファルトの道が続いている。どこで誰に見られるか判らないが、それでもその見晴らしが俺の股間を熱くする。
自分の意志と切り離されたように、まだかまだかと刺激を求めて催促する体の一部

をコートを掴む逆の利き手で握りしめ、歩調に合わせて前後させる。
久々の路上全裸自慰に一気に上り詰め、我慢の限界に達する直前――俺のテンションは一気に下げられることとなった。

……見られた……!!

だが、何故こんな時間に、こんなところに人がいるのだ!?
省電力状態で薄暗い自販機が並んでいるその隙間、本来ならくずかごでも設置されていそうな窪みに、リサイクルボックスの代わりに見知らぬ女の子がすっぽり収まっていた。勿論服は普通に着ていたが、それ以外は駐輪場で見つけた少年と同じように、赤と白の自販機の間にしゃがみ込んでいた。
こんなところに幼女がいるとは気が付かず、微かな光に誘われて自販機に近づいたものだから、彼女の目の前に俺の握り拳が来る位置関係になってしまった。
不幸中の幸いというべきか、女の子はあまりのショックに声も上げられず固まったままだ。現行犯通報される前に、俺は歩みを止めずに何喰わぬ顔でコートを羽織り直し、簡単にいくつかボタンを留めて、そのまま通りすぎようとした。
だが、

「あの！」
俺はコートの裾を掴まれてしまった。今ではあの時の少年の心境がよく解る。アナーキーな姿を見られた相手に言葉を投げかけられるとは、何と気まずいことか！　相手が警察なら仕方がないが、そうでないなら見て見ぬフリをしてくれれば良いものを！
だが、逃げ道のなかった少年と違い、今の俺は裸身をコートで包み込んでいる。これならまだ救いの道はある。
「今、裸でしたか？」
という女の子からの問い掛けに、
「見間違いだろう」
今更感は漂うが、ここは何とか嘘ではない範囲で誤魔化したいところだ。
俺の白々しい返答に、彼女はよいしょ、と立ち上がる。思ったより背が高い。若者らしくミニスカートを穿き、白のVネックの上から薄桃色のカーディガンを羽織っていた。ちょこんと飛び出した束ね髪は、おしゃれというよりも、幼さを感じさせる。
どうしてこんな女の子が一人でこんな時間に？　見れば、足元には彼女の身体に対して些か不釣り合いな大きさのボストンバッグが寄り添っている。
「なるほど。家出娘か」

俺からの反撃に、今度は彼女が身を竦ませる。今のうちに、と羽織っていただけのコートに内側から袖を通し、完全に形勢を逆転させた。

図星を突かれてオロオロと目を泳がせる少女に俺は追い打ちをかける。

「親御さんに迷惑をかけるなよ。交番に行くか？」

「……その格好で、ですか？」

迂闊だった。さすがにこのまま警官の前に出る訳にはいかないか。

お互い引くに引けなくなって押し黙る。この際遭わなかったことにして解散してしまえば良いのに、少女は俺から視線を逸らさない。

「一晩泊めて――」

「やらんぞ」

実家暮らしなので無理だ。一人暮らしでも見ず知らずの女の子を泊めるようなことは、俺にはできない。

再びお互いの間に沈黙が走る。

「裸、でしたよね？」

未だにそれを引っ張るか。

「そんなバカな」

この場で警察を呼んだところで、お互いにとって何のメリットもないことをこのコ

が解ってくれていれば良いのだが。
「あの……裏とか下心とか、そういうのでなくお願いするんですが……」
彼女はちょっと俯き加減に、指先をスカートの前で捏ね回している。変な風向きになってきた。
「コートの中、見せてもらえませんか？」
彼女の言葉をそのまま信用するわけにもいかないが、裏も下心もなく、奇妙な変態男が眼の前にいることに、ある種の興味を抱いているようだ。
無碍に断ることもできないし、彼女自身も警察の世話になるわけにはいかないことも考慮して、
「他言しないと約束できるなら」
彼女は目線だけ左右に逸らして少し考えた後、
「約束します」
端的に答えた。
ならば……構わないか。まさかこんな短期間に自分の裸を一人ならず二人に見せることになろうとは。しかも野外で。
このような対面を他の人に見られるのも厄介なので、手早くボタンをポコポコ外し、そーっと、では無く、バっ、と変質者のようにかっ開いた。

「きゃっ!?」
彼女は漏れそうになった悲鳴は両手で口を塞いで押さえ込んだが、その両目の先は一点に注がれている。
「これって……力入れてるんですか？」
彼女の目の前でむくむくと膨れ上がっているソレのことを言っているようだ。
「いや、無意識による生理現象だ」
少女は左右に角度を変えながら、初めて見る異性の不思議な身体を隅々まで舐めるように見回していく。俺の興奮が収まらないのは、見られているから、ではなく、野外での開放感……だと思いたい。
「外で裸になるのって……どんな気分でしょう？」
俺の足の付根に鼻先を向けながら、上目遣いに視線だけ寄越す。
「もう一度さっきみたいに……ちゃんと脱いでみてもらえませんか……？」
肌蹴るだけに留まらず、再び脱ぐように頼み込む少女。これが逆の立場なら完全にアウトなのだが、彼女は単純に好奇心で尋ねているようだ。
さっきから大人しくしているし、俺はこのコの要求を飲んでみることにした。周囲に彼女以外の人が居ないことを確認して、俺は再びコートから腕を抜き、さっきと同じように肩から掛けただけの格好になる。

深夜の自販機置き場で、股間を〇女に見せつけている全裸の男がいる。俺だ。
「どんな……気分ですか……？」
立直させた下半身の前で、ほんのりと頬を赤らめて見上げる少女が俺に尋ねる。
「気持ちいい……ですか……？」
皮肉で言っているのではなく、何だか面白そうな遊戯に、少し照れながらも加わりたがっているように見える。
ここで正直に答えて良いものかは悩んだが……
「ああ、とても清々しくて、気分がいい」
嘘を吐くことへの罪悪感と、説得力を持つ言い訳が思いつかなかった俺は、いま抱いている感情のままに答えてしまった。
「私も……」
女の子はいきなり口に出すのは恥ずかしいようで、一旦口籠る。だが、それもしばしのことだった。
「私も、脱いでみたい」
自分の意志を確認するように胸元で拳を握りしめ、固く目を閉じた。ぐーっと力を溜めて、そして、
「私もここで裸になっていいですかっ!?」

静まり返った夜道にしては少しばかり大きい声で、俺と同様の破廉恥行為の許可を求めた。それを聞いて俺は、先日会った少年ことを思い出す。

彼はこの町に不慣れで、いきなり大胆な露出行為に走り、一歩間違えれば危ういことになっていた。この少女も、似たような興味を抱いてしまっている。宿泊先の目処も立たないまま家出を決行してしまう行動力を持つコだ。俺がここで止めても、近い将来、必ず真似してしまうことだろう。

ならば、この趣味の嗜み方を今の機会に教えておいた方がいいかもしれない。

幸い俺にロリータ趣味はないので、この少女に性的興奮は抱かない。下半身を盛り上がらせているのは全身に感じている夜の空気だ。きっとそうだ。

「いいぞ。一緒に裸になってみろ」

俺の返事を聞いて、少女の顔がみるみる紅潮していく。撤回しても責める気はなかったが、彼女はコクリ、と一度だけ無言のまま大きく頷いた。

彼女は肩を反らせると、するりと羽織っていたカーディガンを脱ぎ落とす。それは彼女の踵に寄り添っていたボストンバックの上にはらりと舞い降りた。

しずしずとVネックの裾に指をかけ、一気にググっとたくし上げたかと思えば、女子特有の下着が見えるのも構わず勢いよく頭を、袖を、引き抜いた。

それを足元のボストンバッグの上に無造作に置いたところで、俺の視線が気になり

始めたようだ。
「……あ、あ、あまり、見ないで、もらえます……？」
俺の老婆心は、性的羞恥心を与えてしまったようだ。
「さっき、俺のことを見てただろ？」
「そう……ですけど……」
あまり意地悪するのも可哀想だし、彼女が恥ずかしがりそうなところは直視しないようにして、俺は足元の女の子の脱衣をやんわりと見守る。
スカートの脇に手をかけ、腰元を緩める。指を離せば重力に従ってポトリと落ちそうだが、それを手に持ったまま丁寧に下ろしてゆき、足からそっと引き抜いた。
てっきり子供だと思っていたが、上下の下着一組だけになった彼女の身体は意外と発育していることに気がついた。それでもまだまだ〇〇だが。
既に顔を羞恥に強張らせていて、このくらいから始めるのが無難か、と思っていたが、やると決めたら徹底的にやるタイプらしい。固い表情のまま、彼女はブラジャーを捲り上げる。背中側にフック等は付いておらず、上から被るの型のようだ。彼女の両手がそれを胸元から抜き取り、脱ぎ散らかされたVネックの上にふわりと被せた。
隣に人がいるからか、つい反射的に両手で膨らみを隠した彼女だったが、最後の一枚に手を掛けるために、おずおずと胸から手を離した。その手の平の向こう側は大人

に向かっての自己主張を始めたばかりで、片手に余るほど控えめだった。しかし、その先端は、まだ穢れを知らない明るい色合いをしている〇女のソレだ。

俺の存在を最大限に意識しないよう、明後日の方を凝視しながら、彼女は最後の腰布に指を掛け、するする、するすると膝を曲げながら下ろしていく。

子供用の踵の低いミュールは脱ぐことなく、しゃがんだままモゴモゴと右足を抜き、左足を抜き、身体から切り離されたそれを積み重ねられてきた衣服の一番上に置く。

彼女は足元に丸まったままで、その姿は昨日の少年とそっくりになった。しかし、ここは通行人が通りかねない道端の自販機前だ。お互いの服装を考えると、この場に留まり続けるのも危うい。

「ここは目立つ。準備もできたし……行くか？」

と彼女のつむじに声をかけると、

「はっ、は、はいっ！」

と、立ち上がって、背筋をピンと伸ばした。

彼女のソコは、まだ〇〇だった。股間には両脚の延長かのように筋が一本走っているだけで、大人の証は生えていない。幼気な腰回りのこともあるし、彼女の実年齢は俺が思っていたのより低かったのかもしれない。

少女は、俺が自分のコートを手放さないのを見て、

「それ、置いて行かないんですか？　チキンですね！」
と子供っぽい挑発をしてくる。
「これは、緊急時にキミの身体に掛けるものだ」
慣れないうちは、不必要に危険を犯すものではない。
俺からの返答が意外だったのか、彼女はそれまでとは違う赤みで頬を染め、
「よっ、余計な心配ですっ！」
と、背を向けて、一人でズンズン歩き始めてしまう。
慌てて少女の手を取ると、彼女は嫌がる素振りは見せず、俺の手を握り返してくれた。
もしこの状況を誰かに見つかったら、どのように思われるだろうか。少なくとも恋人同士のようには見られないだろうし、かといって、こうして和やかに歩いている限りは襲っているようにも見えないだろう。
こうも立て続けに自分と同じ格好の他人を連れて歩くというのも不思議な気分だ。これが自分と同じ年頃の恋人だったらいうことはないのだが。
ちんまりとした彼女は、男の体が珍しいのか、しきりに腫れ上がった俺のモノをチラチラと気にしている。
「触ってみるか？」

「いいんですか!?」
パッと笑顔を輝かせて、おもむろに俺の足元に跪いた。そして、ここが道端だということも忘れて突き出したそれをペタペタと両手で触りだす。
「何だか……納得です」
ソレを見ることに抵抗がなくなったのか、俺の股間に向かって話しかけている。
「彫刻とか絵とかのコレって柔らかそうだから、どうやって、その……」
言い淀んで、セックス、と小さく呟く。あの男の子と違って早熟らしい。
「……するのかと思ってたんですが、こんな風になるなら……なるほどです」
彼女は小さな両手で俺のモノを包み込んで、前後に扱き始める。優しく、撫でるように。
「気持ちいい、ですか？」
こんな小さなコに玩ばれるのは癪だが
「ああ、気持ちいい」
触れているのは小さくとも女の子だ。それほど悪い気はしない。むずむずと腰を震わせる俺の様子に気を良くしたのか、少し力を強め、動きの速さも増してくる。
「男の人って、こっちが弱いと聞いてましたけど……」
左手を離して、俺の柔らかな部分を軽く握る。ここが力を入れてはいけない場所だ

とは、彼女も知っているらしい。
片手になった分身軽になったのか、握られた前後運動はなお速くなっていく。二箇所を同時に攻められて、我慢していたものが込み上げてくる。
「で……射精るぞ……！」
それなりの知識もあるようだし、何が、とは言わなくても通じるはずだ。
「いいですよー。どうぞどうぞー♪」
彼女は軽いノリで、しごいているモノの先端に顔を近づける。どうやって出てくるのか興味津々な様子だ。
そして……

ビュルっ……ビュルっ……！

「ひゃっ!?」
飛び出してきた温かな粘液が顔に掛かって、彼女は思わず手を離して後ずさる。それでも俺の勢いは止めどなく、彼女の身体に向かって汚していく。
「白い……確かにオシッコとは違うようですねー」
顔についたそれを指で掬って、二本の指でネバネバと遊びながら、匂いを嗅いだり

している。
「にがっ」
軽く舐めてみたものの、不愉快な苦味に舌を出す。
自分の性欲が軽くなって、少し自問自答する。初めて出会った女の子とこんなことをしていて良かったのだろうか。身体を綺麗にして、早く家に返した方が良いとも思ったのだが……
「今度は私の方を手伝ってくれますよね？」
自分ばかり気持ち良くなって終わりではないですよね？　と笑顔で突き付けられる。断ったら何をされるやら。ここで彼女が大声を出すだけで、俺は社会的に抹殺される立場なのだ。
耳年増な彼女なら、自慰についても初めてではなさそうだ。彼女の中の性欲に一区切り付けば、大人しく家路に就いてくれるだろう。
「それはいいけど、場所を変えよう」
同じ場所に留まり続けるのは危ない、ときちんと教えて、俺たちは近所の公園までやってきた。ここにはコンクリート製の大きなドーム型の遊具がある。これの頂上からは幅の広い滑り台状のスロープが彫られていた。遊びに来た子供たちが様々な方角からよじ登り、ここを伝って滑り降りていくように設計されたものである。

そのドーム型遊具の裏側、外の路上から陰になっているベンチで俺は、小さな女の子と、〇〇らしからぬ遊びに興じようとしていた。

背もたれに手荷物のコートを掛けると俺は、彼女にベンチに座ってこちらに向かって大きく両足を開くように指示した。手伝えと言うのなら、当然そのような姿勢を取る必要がある。

「これはちょっと……恥ずかしいですね」

そう言いながらも、彼女は素直に俺の言葉に従う。子供のような無垢な姿のまま、股の間の大人になりかけた身体の一部をこちらに見せつけている。発毛はまだだが、綺麗な割れ目に指を差し入れ拡げてみると、中は相応に女らしく、こちらも胸の先と同じく綺麗に桃色がかっていた。外部からの力に開かれたことによって女性性を湛えられた水瓶からその中身が滴っていく。恥じらいのない大胆な姿を晒しているが、決して恥じらいを知らない子供ではない。恥じらいを知った上で、なお性的な快楽を期待しているのだ。

思わず自分の下半身が反応しかかるが、ソレを包み込むには彼女の躰はあまりに小さく、何よりこんな〇女とまぐわっている自分の姿を客観的に想像すると、その欲求も萎えていく。

零れ落ちていく彼女の体液を掬い取って、複雑に絡み合ってできた突起に擦り付け

てやる。
「あっ……」
女子の身体は男ほど丈夫にできていない。皮を剥いてつるりと出てきた一際小さな中身を触れているかいないか、という優しさで指の腹を近づけてみた。
「はぅ……ん……❤」
それだけで、彼女は〇〇らしからぬ甘い声を上げてしまう。
「すごっ……自分でするのと……全然違うっ……！」
他の人に官能的に触れてもらう機会など、彼女の歳ではなかなかないことだろう。
そこで、俺は少々サービスしてやることにした。
「え……!?　そんなとこ……舐めたら……!?」
先端の周りを両手を使ってしっかりと開き、敏感になったところを舌の先で一度だけグイっと押し込んでみた。
「気持ちいいか？」
彼女の股間から顔を離して、さっき彼女から訊かれたように、今度はこちらから訊き返す。
「え……!?　あの……、それは……」
ほんのり染まっていた頬を更に紅潮させて、コクリと頷いた。

「はい、とても気持ちいいです……。もっとお願いします……❤」
羞恥を押し込んで、彼女はこちらにこの行為の続行を自ら願い出た。
彼女が相応に大きければ良かったのに、と思いながらも、俺は彼女の豆粒を舐め続ける。更に、両の親指を使って、ひだの隙間を掻き回す。
「ふぁっ、ああんっ❤　あっ……あ……あ……ああっ！」
外からは見えないとはいえ、公園の敷地の隣には民家も建っている。時間が時間だけに室内は完全に沈黙し、誰かが起き出す気配はないが、あまり大きな声を出されてもマズい。
彼女に舌を這わせながら上目遣いで様子を伺うと、こちらのことなど忘れて、下半身から迫り来る快楽に身を委ねていた。空いていた彼女自身の両手は胸の脂肪の上に充てがわれ、両端の小粒をしきりに摘んでグリグリと揉みほぐしている。
「いいっ！　凄いのっ❤　こんなのっ！　ふあっ！　あああぁんんっ!!　飛ぶっ❤　飛んじゃう❤　飛んじゃうよぉぉぉっ❤❤❤」
声を抑えるように注意したいが、この状態では喋るに喋れない。彼女もクライマックスに近いようなので、このまま絶頂（イカ）せてしまうことにした。
舌は全力で彼女が欲しがるところをザラザラと舐め回し、掻き回していた両指も、痛がらないように力は抜いたまま、クチュクチュと念入りに彼女の中を混ぜ回してい

く。

「凄いっ！　いいのぉっ❤　あっ、ああっ、あああああああああっ❤❤」

彼女の身体が激しくビクンと跳ねた。そのままビクビクと痙攣を続け、ベンチからずり落ちてしまいそうだ。

彼女を支えてやろうと腰を上げたところで、彼女の嬌声の色が少し変わってきた。

「はぁ……あぁ……あぁぁん……」

上り詰めていた時と異なり、今は満足げに弛緩しているようだ。その気の緩みが全身に伝搬し、押し留めていたものが彼女の身体から迸る。

「おっと！」

間一髪、慌てて身を翻すと、たった今まで自分がいたところに向かって彼女の黄金色がかった温水（ぬくみず）が放物線を描いて噴き出した。それは、乾いた土の地面を黒々と濡らしていく。

「あ……はぁ……出ちゃった……お漏らししちゃいましたぁ……❤」

自分の排泄行為を、彼女は恍惚とした表情でこちらに報告する。完全に羞恥に酔っているようだ。もし彼女が再び外で裸になるようなら、ここまで繰り返すだろうな。

「排泄は同じ場所でするなよ。一度ならともかく、二度ともなるとさすがに気づかれる」

「はぁい……違うところでしまぁす……❤」

やはり、この行為が気に入ってしまったのか……。露出とは別枠でも軽犯罪に当たることを教えておかなくてはならないな。

しかし、彼女の言う『違うところ』とは、俺が考えていたのと少しニュアンスが異なっていた。

「そもそも、明後日には私、この町にはいませんし……」

息を整えながら、少しずつ冷静さを取り戻してきた彼女は、自分の家出の理由を話し始めた。俺は、彼女の隣に座ってそれを聞く。

彼女が家を抜け出してきた理由――それは両親の転勤だった。彼女も先日の少年と同じく、中学校への進学直前に別の見知らぬ土地への転居を余儀なくされたのだ。

仲の良かった友人らとの別れもあるが、

「中学の三年間だけとはいえ、何が悲しくてあんな山奥に……」

少年とは逆に、町から田舎への転居。親の勤務先の工場の他に何もない山村に三年間も幽閉されると思うと、四月からの生活に絶望しか感じられなかったらしい。

それでこっそり家出してみたものの、行く宛もなかった。彼女はそんな現実に憤り、全ての常識をぶち壊してくれる人でも現れないか、と願っていた。そこに非常識な姿の俺が通りがかった、というわけだ。

「とにかく私、何かを変えたかったんだと思います」
しかし……出会う相手を間違えていたら、取り返しの付かないことになっていたかもしれない。重犯罪的な意味で悪い大人も少なくないのだから。
「神はその者が耐えきれない試練を与えたりはしない。キミの転居にもきっと意味があるのだろう」
気休めにはなるかと励ましの言葉を送ったが、今の彼女には不要な心配だったようだ。
「はい！　折角ですから、来月からの三年間は、あっちでしかできないことを存分に堪能してこようと思います！」
ナニを楽しむつもりか不安は絶えないが、彼女は迷いが晴れたようにニッコリとはにかんでいる。そんな前向きな様子を見て、自分のしたことは間違っていなかったと信じることにした。
「お礼に……」
女の子はベンチの上に横座りなって体をこちらに向け、先ほどのように大股を開く。
「私の処女、貰ってくれませんか？」
やれやれ、と溜息をつき、俺はベンチから腰を上げた。
「早熟なのは結構だが、セックスだけは結婚するまで取っておけ。この人の子を産み

たい、と思える相手と出逢えるまでな」
私、貴方の子なら――と彼女が言いかけたのを遮るように頭を掌でわしゃと掴む。
「今さら子供扱いですか？　私の顔、カピカピにしておいて……」
そうやってふて腐れるところがまた子供っぽい。
「性器が交わらない限りはオナニーの延長線だ。子供の準備体操だよ」
それじゃ、そろそろ帰るぞ、と満足したであろう彼女の肩に俺のコートを掛けようとするが、
「余計なお世話ですっ！」
と突っ返し、可愛らしいお尻をプリプリ振りながら、一人で先行していく……が、すぐに立ち止まる。俺がその手を握りやすいよう横に差し出しながら。
苦笑しつつ彼女の手を、行きのように握ってやった。
「私もお兄さんと一緒に裸がいいんですっ！　お兄さんにだけ恥ずかしい想いはさせませんとも！」
それこそ余計な世話ではなかろうか。何故なら、彼女は恥ずかしさを自認しながらも、本当に楽しそうな微笑みを浮かべているのだから。
これから服を着込んでこっそり帰り、彼女のご両親が起きる前に汚れを洗い流しておけば、彼女は再び日常に戻れるはずだ。しかし、日常は日常でも、見える世界はガ

ラリと変わってしまっているだろう。現実的にも、精神的にも。

小さな彼女の、小さな手を握って夜道を歩きながら、この手が大きくなった時、結ばれる相手が彼女を満たしてくれる器であるを、俺は祈っていた。

僕と私の露出日記

添牙いろは

Twitter: http://twitter.com/soekiba
Facebook: http://www.facebook.com/soekiba

イラスト

毒でんぱ
http://bluekiller.sakura.ne.jp/
ターヤ（一部背景作画）

発行

2014/11/24　第一版
2015/03/12　第二版

空色書房

http://soekiba.net

添牙いろはの作品紹介

空色書房
Sleeping under the sky

わたしとあなたの露出交換日記

露出狂 vs 覗き魔

『僕と私の露出日記』で二人を支えてきた
お兄さんとそのお嫁さんの馴れ初めの物語です。
彼らには彼らの苦悩がありました。
勿論、野外露出的な意味で……

詳しくはWebで
http://soekiba.net/outdoor/02/

添牙いろはの作品紹介

空色書房
Sleeping under the sky

輝山工祐の前に突如現れたきの子と名乗る後輩の少女。
彼女との出逢いが同級生・鷹池との関係も急変させてしまう……!

※一般作品になります。

『彼女は忍者をまちがえている』のきの子視点のスピンオフ!
輝山の知らないところで繰り広げられる痴態が明らかに!?

※一般作品になります。

『彼女は忍者をまちがえている』のパラレルストーリー!
些細なボタンの掛け違いから、二人との関係は一気に肉欲にまみれ…。
※成人向け作品になります。

裸族忍者シリーズ

着衣嫌いな裸族少女が一人の男子に恋をした。
しかし、彼女の前には強大な恋敵が立ちはだかる!
裸の想いは、彼の元へと届くのか……!?

詳しくはWebで
http://soekiba.net/ninja/

空色書房
Sleeping under the sky

兄は指揮官に
妹は銃殺刑に

迫り来る反逆者（テロリスト）！
担がれる民間人（プリンセス）！
そして……
掻き乱す問題児（アホのコ）!!

斯くして国家は
滅びたのであった……。

妹はお風呂嫌いで
王女はエルフ耳非処女好き

ヒロインたちと性的な意味で
身体を交える番外編！
18歳未満の方はご購読できません

詳しくはWebで
http://soekiba.net/astra/

空色書房
Sleeping under the sky

ゲーム会社でつくったゲーム

ゲームって……ナンだ!?

ただシナリオを追っていくだけで
ゲームと呼べるのか?
ボタンを連打するだけでゲームなのか?
そもそも、ゲームとは一体何だったのかを
考える一冊です。

詳しくはWebで
http://soekiba.net/game/

空色書房

Sleeping under the sky